

東アジアにおける経済学導入史

赤間 道夫（愛媛大学）

はじめに

日本の経済学導入史を振り返ってみると、マルクスを含む古典派から新古典派にいたるまで大部分が翻訳を通してであった。経済学導入という視点からみれば、欧米においても同様であり日本にかぎったものではない。「輸入学問」として揶揄されかねない翻訳を通じた普及と受容も、とりわけ「市民社会」をキーワードとする近代化の過程に位置づけてみると、むしろより積極的な意味もっている。

ここでは中国と韓国を中心に東アジアへの経済学の普及状況を分析することによってそうした翻訳＝受容の一端をみてみたい。よく知られているように、経済学の東アジアへの導入は欧米から直接ではなく日本を経由した時期がある。19世紀末から20世紀初めにかけての時期、いち早く近代化を成し遂げた日本は、東アジア諸国における日本の植民地支配との緊張関係のもとで東アジア圏でもっとも影響力をもっていた。日本をひとつのハブとしてこの時期に集中的に紹介されたのがマルクス経済学と古典派経済学である。

本報告では東アジアにおける経済学導入の実際を紹介し、日本から東アジアへの一方的な影響だけでなく、東アジアから日本への影響も無視し得ないことを明らかにしたい。

(1) スマイルズ【平川】

(ア) 英語から一冊丸ごと訳した最初の本

(イ) 中村正直『西国立志編 原名 自助論』1870（明治3）年→Samuel Smiles, *Self-Help*, 1859

(ウ) 黄遵憲（駐日清国公使館）：中村の漢文を通じてスマイルズの産業文永礼賛が東アジア漢字圏へ広がる

(エ) 羊羔（ようこう）『自助論』（上海海通社，1903年）

① 楊昌濟によるスマイルズ（斯邁爾斯）の紹介（『新青年』2-4, 2-5, 1916-17）

② 娘は毛沢東の最初の妻→「自力更生」への影響？

(2) ハックスリー【平川】

- (ア) 中国における西洋思想の本格的受容：Thomas Huxley（赫胥黎，1825-1895），*Evolution and Ethics*, 1893；巖復訳『天演論』（1898）
- (イ) 巖復訳『羣己権界論（ぐんこけんかいろん）』1903（魯迅，胡適も読む）
←J. S. Mill, *On Liberty*（中村訳『自由之理』1872，梁啓超「日本中村正直ハ維新ノ大儒ナリ」）

(3) J. S. ミル【鈴木】

- (ア) *The Subjection of Women*, 1869→抄訳：深間内基『男女同権論』878（明治11）年：全訳：野上信幸訳『婦人解放の原理』1921（大正10）年→「男女同権」の言葉を一気に社会に広める

(4) A. スミス【トッドら】

- (ア) 巖復訳『原富』1902年
- ① 「英倫ス密亜丹原本，候官巖復畿道翻訳，原富，南洋公学訳書院第一次全書出版」
 - ② 和綴本，全8冊581丁
 - ③ 原本：J. E. T. Rogers 編オックスフォード版（1869年，第2版1880年）
 - ④ 中西年表を付した年号対照
 - ⑤ 部分訳で，9冊本（1929年），3冊本（1930年，用語解説付き）
- (イ) 王亜南等訳『国富論』：詳細不明
- (ウ) 劉光華訳『国富論』：詳細不明
- (エ) 韓国語訳：「崔虎鎮，丁海東共訳，国富論，春潮社，1971年」
- ① 1394ページからなる大部の1冊本
 - ② 底本：E. Cannan 版第6版（1950年）
 - ③ 崔は九州帝国大学で経済学を学んだ経歴
 - ④ 竹内謙二訳，青野季吉訳，大内兵衛訳を参照

(5) 『共産党宣言』

- (ア) 日本における翻訳＝影響史【橋本】
- (イ) 中国【大村ら】

- ① 1848 ドイツ語版→1888 英語版→1906 日本語版→1920 中国語版
- ② 陳望道訳（上海『星期評論』, 1920年, 7部のみとも1000部とも）, 成仿吾・徐冰訳（延安解放社, 1938年）, 華崗訳（華崗書店, 1930年）, 英華対訳, 各種序文の英文）, 陳瘦石訳（1943年）, 博古（秦邦憲）訳（中央委員会付属, ロシア語版を参照）, モスクワ訳（1948年）, 編訳局訳（1949年, 著作集・選集に収録）, 編訳局訳（1995年, 最新中国語訳）
- ③ 韓国語については詳細不明

(6) 課題の整理

(ア) 19世紀末から20世紀初めにかけて日本を經由して中国に導入

- ① 中村正直の役割（漢文基調）
- ② Smiles や J. S. Mill らから古典派経済学を経てマルクスへ
 1. ただし, 全容は不詳
 2. とりあえず, 古典派経済学の状況について調査中
- ③ 日本への中国人留学生（亡命者）の存在
- ④ 中国革命への思想的インパクト

(イ) 中国におけるマルクス・エンゲルス

- ① マルクス・エンゲルス著作編訳局：1953年1月創設
- ② 第1版『マルクス・エンゲルス著作集』50巻53冊（1985年までに完成）
- ③ 第2版が進行中（2006年までに16巻刊行）

(ウ) 韓国

- ① 『資本論』『ドイツ・イデオロギー』については一定判明（戦後中心）
- ② 古典派などは1971年が初訳？

【文献リスト】

- (1) 荒畑寒村『平民社時代』1973年
- (2) 石川禎浩「陳望道訳『共産党宣言』について」『颯風』27号, 1992年
- (3) 石川禎浩『中国共産党成立史』岩波書店, 2001年
- (4) 區建英『自由と国民一敵復の模索一』東京大学出版会, 2009年12月
- (5) 大村泉「日中両国における『共産党宣言』の受容＝翻訳史概観」『マルクス・エンゲルス・マ

- ルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (6) 賀婷「陳望道訳『共産党宣言』（1920 年）の翻訳底本について」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (7) 高晃公『魯迅の政治思想—西洋政治哲学の東漸と中国知識人—』日本経済評論社，2007 年 12 月
- (8) 齋藤毅『明治のことば—文明開化と日本語—』講談社学術文庫，2005 年 11 月
- (9) 酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触—相互誤解の日中教育文化交流—』ひつじ書房，2010 年 3 月
- (10) 堺利彦「共産党宣言日本訳の話」『労農』4-2，1930 年
- (11) 笹野ゆり「いつ頃「共産主義」という訳語は生まれ、また定着したのか？—日本で明治期に出版された代表的な英日字典および新聞論説に基づく事例研究—」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (12) 柴方国（橋本直樹訳）「マルクスおよびエンゲルスの諸著作の体系的翻訳—中国語『マルクス／エンゲルス著作集』第 2 版について—」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 47 号，2006 年 10 月
- (13) 徐水生「翻訳の造語：嚴復と西周の比較—哲学用語を中心に—」『北東アジア研究』第 17 号，2009 年 3 月
- (14) 蔣仁洋（橋本直樹訳）「中国における『共産党宣言』の翻訳および普及」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 47 号，2006 年 10 月
- (15) 鈴木しづ子『『男女同権論』の男—深間内基と自由民権の時代—』日本経済評論社，2007 年 10 月
- (16) 玉岡敦「日本における『共産党宣言』の翻訳と、訳語の変遷—1904 年から 1925 年まで—」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (17) 陳力衛（賀婷・笹野ゆり訳）『『共産党宣言』の翻訳問題—版本の変遷からみた訳語の先鋭化について—』『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (18) トッド，W. B.，カーペンター，K. E.，大河内暁男「書誌的にみたスミス『国富論』の形成とその国際的伝播」雄松堂書店，1976 年
- (19) 永田圭介『嚴復—富国強兵に挑んだ清末思想家—』東方書店，2011 年 7 月
- (20) 橋本直樹「中国における『共産党宣言』の翻訳＝影響史について」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 47 号，2006 年 10 月
- (21) 橋本直樹「『共産党宣言』の『ドイツ語ロンドン新聞』再録の背景」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 49 号，2008 年 6 月
- (22) 班偉「清末における「自由」概念の受容—嚴復の自由論を中心に—」山陽学園大学『山陽

- 論叢』第5号，1998年12月
- (23) 平川祐弘『天ハ自ラ助クルモノヲ助ケ—中村正直と『西国立志編—』名古屋大学出版会，2006年10月
- (24) 平野健一郎「国際文化交渉論の現在—シュウォルツの厳復論から国際文化論への軌跡—」関西大学『東アジア文化交渉研究』第2号，2009年3月
- (25) 平野義太郎「『共産党宣言』の日本訳の嚆矢」『社会評論』1948年2・3月号
- (26) フォミチョフ，ヴァレリイ（橋本直樹訳）「ロシア国立社会・政治史文書館の蔵書中におけるK.マルクスおよびF.エンゲルス著『共産党宣言』諸版本の収集概観」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第47号，2006年10月
- (27) Frankenstein, Nobert, Übersetzungen des “Manifestes der kommunistischen Partei” ins Japanische, 1978
- (28) 宮島達夫「『共産党宣言』の訳語」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房，1979年10月
- (29) ムスト，マルチェッロ（窪俊一・大村泉・橋本直樹訳）「イタリアにおける『共産党宣言』の普及と受容—1889年から1945年—」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第47号，2006年10月
- (30) Must, Marcello (ed.), Karl Marx's Grundrisse: Foundations of the critique of political economy 150 years later, Routledge, 2008.
- (31) 李基俊『西欧経済思想と韓国近代化—渡日留学生と経済学—』東京大学出版会，1986年9月
- (32) 李正聚（解澤春訳）「『共産党宣言』と中国」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第49号，2008年6月
- (33) 林恵昭「厳復の啓蒙思想とその思想的背景」『金城学院大学大学院文学研究科論集』第7号，2001年3月
- (34) 同「近代アジア知識人の西洋思想受容について—福沢諭吉と厳復の啓蒙思想の比較—」堂々第4号，1998年3月